

THE SAISON FOUNDATION  
ANNUAL REPORT

2015

April 2015  
to  
March 2016



## 目次

ごあいさつ	4
事業概要	6
本年度の事業について	10
助成事業	15
Ⅰ. 芸術家への直接支援	16
Ⅱ. パートナーシップ・プログラム	38
自主製作事業・共催事業等	57
事業日誌	68
会計報告	69
評議員・理事・監事・顧問名簿	71

## TABLE OF CONTENTS

PREFACE
PROGRAM OUTLINE
ABOUT OUR PROGRAMS IN 2015
GRANT PROGRAMS
I. Direct Support to Artists
II. Partnership Programs
SPONSORSHIP, CO-SPONSORSHIP AND OTHER PROGRAMS
REVIEW OF ACTIVITIES
FINANCIAL REPORT
TRUSTEES, DIRECTORS, AUDITORS AND ADVISER

## ごあいさつ

今年上梓された『セゾン文化財団の挑戦』（片山正夫著 書籍工房早山刊）の頁を繰っていて、当財団主催の「内なる国際化を目指して」と題するシンポジウムが、かつて京都で開かれたという記載が目にとまりました。1992年の開催ですから、私が最初に評議員としてこの財団に関わる10年近く前のことです。

なぜ目にとまったかといいますと、この「内なる国際化」という言葉にこめられた問いかけが、四半世紀近く経った今でもなお、重要な意味をもつと直感したからに他なりません。

国際化、あるいはグローバル化は、現代の交通手段や通信技術の進歩の帰結であるかのようにはしばしば語られます。わが国の場合、近代化前の徳川幕府が鎖国政策をとっていたために、殊にそう感じてしまうのかもしれませんが、しかし、私が個人的に関心を寄せている奈良時代などは、ある意味で日本は非常に国際化していたといえます。たとえば752年に行われた東大寺の大仏開眼供養では、インドの僧正が導師を務め、中国、朝鮮、タイ、ベトナムなど様々な国から人々が列席して、度羅楽、高麗楽、林邑楽など各国の舞が披露されました。飛行機もインターネットもない当時の奈良の都は、今でいう国際都市だったのです。

翻って現在、日本では、海外からの訪日客を2020年までに4000万人にするとか、インバウンド消費がどれだけ増加したといった議論が盛んに行われ、一見グローバル化がますます進捗してきているかのようです。ただ一方で、これは日本に限りませんが、若者の「内向き」化が言われ、排他主義的な言辞や行動は、むしろ勢いを増しているようにさえ見えます。

おそらく、交通や通信の進歩だけが国際化をもたらす要件なのではなく、また国際化の度合いは人やモノの行き来だけで測れるものではないということでしょう。重要なのは、お互いを理解し尊重する精神が、個々人のうちにどれだけ根付いているかということではないかと思います。

当財団が継続的に支援しているさまざまな芸術交流も、そうした「内なる国際化」に貢献するものであることを強く期待しています。今後も皆様の変わらぬご指導、ご鞭撻をお願いする次第です。

公益財団法人セゾン文化財団

理事長 伊東 勇

## Preface

Browsing through *The Challenge of The Saison Foundation* (Masao Katayama, Shosekikobo Hayama Publishing Co., Ltd.) that was published this year, I was drawn to a comment on a symposium in Kyoto entitled "Toward Internal Internationalization" organized by the Foundation. It was in 1992, ten years before I began to be involved in the Foundation as a trustee.

It drew my attention because I had a hunch that the question that the term "internal internationalization" implied would still mean a lot now, almost 25 years after the symposium.

Internationalization, or globalization, is often said to be the result of the improvement in transportation and communication in the contemporary world. Especially in Japan, probably due to the national isolation policy of the Tokugawa Shogunate before the modernization, we tend to feel that way. However, for example, the Nara Period was in a sense very international, which I have personally been interested in. The ceremony for the Great Buddha statue at Todaiji Temple in 752 had an Indian monk officiate the ceremony, invited many people from China, Korea, Thailand and Vietnam, and presented different dances that are said to have come from Burma, Korea or Vietnam. Nara, in an age without the Internet or airplanes, was what is now called a global city.

Meanwhile, there have been a lot of discussions about having 40 million international visitors by 2020 or the increase of their consumption in Japan. It seems that, at first glance, Japan has become more global. However, not only in Japan, young people have become more and more introverted, and exclusive discourses and behaviors have been more and more active.

Probably the improvement in transportation and communication is not the sufficient condition of internationalization, and the degree of internationalization cannot be measured only by the traffic of people and things. I think that what is important here is how the spirit of mutual understanding and respect has been established in each and every individual.

I strongly hope that the diverse artistic exchange, which we have continuously been supporting, contributes to the "internal internationalization." I look forward to your continued guidance and encouragement.

Isamu Ito  
President, The Saison Foundation

# 2015年度事業概要

## 助成事業

### I. 芸術家への直接支援

#### 1. 現代演劇・舞踊助成 —セゾン・フェロー

演劇界・舞踊界での活躍が期待される劇作家、演出家、または振付家の創造活動を支援対象としたプログラム。フェローに選ばされると、自らが主体となって行う創造活動に当財団からの助成金を充当することができるほか、必要に応じて稽古場、ゲストルームや情報の提供が受けられる。原則として、ジュニア・フェローは2年間、シニア・フェローは3年間にわたって助成を行うが、継続の可否に関しては毎年見直す。対象は、下記の条件を満たしている劇作家、演出家、または振付家。

##### ジュニア・フェロー

- ・日本に活動の拠点を置いている
- ・申請時点で35歳以下である
- ・申請時点で過去3作品以上の公演実績がある

※ただし、過去に当財団の「芸術創造活動I」プログラムで支援を受けた芸術団体の主宰者は対象外。

##### シニア・フェロー

- ・日本に活動の拠点を置いている
- ・原則申請時点で45歳以下である
- ・申請時点で過去3作品以上の公演実績がある
- ・以下のいずれかの要件を満たしている
  - ・劇団／ダンスカンパニーの主宰者としてセゾン文化財団の助成歴がある
  - ・戯曲賞／演出家賞／振付家賞等の受賞歴がある
  - ・海外の著名なフェスティバル／劇場から招聘歴がある

※ただし、過去に当財団の「芸術創造活動II」プログラムで支援を受けた芸術団体の主宰者は対象外。

#### 2. 現代演劇・舞踊助成 —サバティカル(休暇・充電)

日本を拠点に活動する劇作、演出、振付の専門家として5年以上の活動歴を有し、1ヶ月以上の海外渡航を希望する個人に対し、100万円を上限に、渡航費用の一部に対し助成金を交付。申請時点までに継続的に作品を発表・制作し、一定の評価を受けているアーティストで、2015年度中にサバティカル(休暇・充電)期間を設け、海外の文化や芸術などに触れながら、これまでの活動を振り返り、さらに今後の展開のヒントを得たいと考えている者を優先する。

## 自主製作事業・共催事業等

### II. パートナーシップ・プログラム

「パートナーシップ・プログラム」では、芸術創造を支える機関・事業や、国際的な芸術活動を展開する個人／団体を当財団のパートナーとし、日本の舞台芸術の活性化や国際的な協業の推進を目指している。

#### 1. 現代演劇・舞踊助成 — 創造環境整備

演劇・舞踊界の人材育成、システム改善、情報交流など芸術創造を支える環境の整備を目的とした助成プログラム。現代演劇・舞踊界が現在抱えている問題点を明らかにし、その創造的解決を目指した事業に対し、企画経費の一部を助成し、希望者には森下スタジオ、ゲストルームを提供する。原則として同一テーマ／企画の継続助成は3年間を限度とする。

#### 2. 現代演劇・舞踊助成 — 国際プロジェクト支援

演劇・舞踊の国際交流において特に重要な意義をもつと思われる複数年にわたる国際プロジェクトへの支援を目的とした助成プログラム。海外のパートナーとの十分な相互理解に基づき、発展的に展開していくプロジェクトを重視。リサーチや、ワークショップなどプロジェクトの準備段階から、申請することが可能。企画経費の一部に対して助成金を交付。希望者には森下スタジオ、ゲストルームを提供。3年を上限として助成を行う。対象となるのは、日本と海外双方に事業のパートナーが決定しており、申請時点で国際交流関係の事業の実績を持つ個人／団体。

#### 3. 芸術交流活動[非公募]

海外の非営利団体との継続的なパートナーシップに基づいた芸術創造活動、日本文化紹介事業等に対して資金を提供する。

#### フライト・グラント

海外からの招聘に伴う渡航費が緊急に必要な場合の支援プログラム。

自主製作事業として ヴিজティング・フェロープログラム、セミナー、ワークショップ、シンポジウムの主催、ニュースレターの刊行などを行う。

共催事業では、日本の舞台芸術界を活性化させるために非営利団体等と協力して事業を実施する。

# PROGRAM OUTLINE – 2015

## GRANT PROGRAMS

### I. Direct Support to Artists

#### 1. Contemporary Theater and Dance - Saison Fellows

This program supports creative activities and projects by promising playwrights, directors, and choreographers. Fellows will be awarded grants that they may spend on their creative work, priority use of the Foundation's rehearsal and residence facilities in Tokyo (Morishita Studio), and may receive information services that are necessary to their work. Junior Fellows (artists that are thirty-five years old or younger) will receive ¥1,000,000 for two years in principle; Senior Fellows (artists that are forty-five years old or younger) will receive grants (Range of grants given in this program in 2015: ¥2,500,000 - ¥3,000,000) for three years.

#### 2. Sabbatical Program

This category gives partial support to individuals who wish to travel abroad to come into contact with intercultural experiences by awarding fellowships up to ¥1,000,000. Applicants must have (a) a base in Japan; (b) more than five years of professional working experience in one of the following occupations: playwriting, directing, or choreography; and (c) plan to travel abroad for more than one month.

Priority will be given to artists who have been creating and presenting works continuously until the time of applying to this program, have an established reputation in their respective fields, and are considering to take a sabbatical leave during fiscal year 2015 to review their past activities and receive inspiration for future activities through inter-cultural experiences.

### II. Partnership Programs

#### 1. Contemporary Theater and Dance - Creative Environment Improvement Program

This program supports workshops, conferences, symposia, and other projects aimed to improve the infrastructure of the contemporary performing arts community in Japan. Priority use of Morishita Studio is also awarded upon request.

#### 2. Contemporary Theater and Dance: International Projects Support Program

A grant program that awards long-term grants to international exchange projects in which contemporary Japanese theater or dance artists/companies are involved. Priority use of Morishita Studio is also awarded upon request. Those eligible to apply to this program are (a) individuals or companies based in Japan or have partners in Japan, and (b) with a history of artistic achievements in the area of intercultural exchange activities at the time of application.

#### 3. Artistic Exchange Project Program (designated fund program)

This designated fund program supports activities by not-for-profit organizations outside of Japan with a continuous partnership with the Saison Foundation, including creative work by artists/companies, projects with the aim to familiarize Japanese culture to other nations, and fellowship programs.

Note: Applications to this program are not publicly invited.

#### Flight Grant

This outbound (from Japan to overseas) program supports those in immediate need of travel funds.



## SPONSORSHIP, CO-SPONSORSHIP PROGRAMS

Apart from making grants, The Saison Foundation sponsors and organizes a Visiting Fellows Program, seminars, workshops, and symposia, and publishes a newsletter.

In order to support and enhance the creative process within contemporary theater and dance and to stimulate the performing arts scene in Japan, The Saison Foundation also organizes projects by working with artists/companies, not-for-profit organizations, and other groups under its co-sponsorship program.

## 本年度の事業について

### 常務理事 片山正夫

本年度は、現代演劇・舞踊分野を中心に、55件の助成を行った。助成総額は、前年に比べ6%強増額し、6351万円となった。

また、海外から4名のヴィジティング・フェローを招聘し、2件の共催事業を行った。このほか、研究会を1件開催し、前年度に文化庁と共催した「ダンス・アーカイブの手法」のフォローアップ事業3件に協力した。詳しい催行状況については、各プログラムの報告を参照していただきたい

当財団の活動の特色のひとつは、助成金だけでなく、他の方法も併せて助成先を支援していく点にある。代表的なものが、森下スタジオを活用した「場」の提供だ。助成対象者の必要に応じて、廉価でスタジオをお貸ししている。近隣の水天宮ビッドなど、稽古場支援が以前より普及したとはいえ、東京周辺で活動する若手芸術家が作品製作の場の確保に苦勞する状況は、森下スタジオが開館した当時と大きく変わっておらず、貸し出しのニーズは依然として高い。

舞台作品の場合、作品の特性上、長期間にわたってひとつのスペースを独占的に使用しなければ製作が困難なケースがある。最近ではその典型が、タニノクロウ氏による演劇の仕事であった。

タニノ氏はかつてマンションの自室を「はこぶね」と称し、そこを作品製作・発表の拠点としていたが、ほどなく再開発のため立ち退きを余儀なくされた。しかし同時期にセゾン・フェローに採択されていたことから、森下スタジオでの作品製作を本格的に始めることになった。

ちょうど2期に亘るジュニア・フェローの助成期間を終え、シニア・フェローに移行した2012年度のこと、「森下でなければ創れない作品を創りたい」というタニノ氏の要望に応え、当財団は例外的な長期間、森下スタジオを提供することに同意した。氏の作品は、自身の手になる独特な舞台装置に大きな特色がある。それは作品の一部であることはもちろん、演出の一部でもあり、戯曲とも不可分なものだ。氏は、それまでより広く、かつ制約の少ないスペースを得ることで、大きくスケールアップした舞

台装置の製作に取り組み、それによって新たな作品世界に到達することに成功した。

その「森下スタジオ発」の第一弾作品が、2013年春に同スタジオで初演された『大きなトランクの中の箱』であり、これは翌年の欧州ツアーでも大きな賞賛を得ることになった(当財団はその際、ツアーの受け入れ先に対しても助成を行っている)。

本年度、当財団との共催事業として、同じく森下スタジオで製作され初演された『地獄谷温泉 無明ノ宿』は、その第二弾である。今回も作品の評価は非常に高く、タニノ氏による戯曲は、選考委員の満場一致で第60回岸田國士戯曲賞を受賞することになった。本作品は今後、国内外での上演が予定されている。

芸術助成において、その成果をどう認識し、評価するかはいつも議論になるところだ。われわれもそのことに長く関心をもち続けてきたが、このタニノ氏の事例は、助成の成果というものを考えるうえで非常に示唆的であったといえる。

セゾン・フェローで当財団が支援対象としているのは、芸術家の創造活動そのものであり、個々の公演ではない。そのため助成の評価は、助成期間中に生じた変化、すなわち作品や活動の展開、さらにそれらが社会にどう受容され影響を与えたかという点に根拠を求めることになる。当然、そのためには長い期間が必要だ。当財団が複数年の支援を基軸に置いているのも、ひとつはそこに理由がある。タニノ氏の場合、セゾン・フェローとして当財団が支援した期間だけで通算7年にも及ぶが、この間の目覚ましい展開はそのまま、(すべてが助成の結果とはもちろん言わないが)われわれが認識すべき助成の成果の分母となる。『地獄谷』はまさにその到達点であった。

さらにいうと、当財団の助成プログラムの独自性が、芸術家の変化にどう寄与したかという点も、じつはわれわれにとって、もうひとつの大事なポイントである。タニノ氏がセゾン・フェローに採択されたことによって、森下スタジオの空間に出会い、空間に出会ったことによって「大きなトランク」や『地獄谷』が生まれ、そしてこれらの作品が生まれることが、また別の誰かの想

像力を喚起していく。こうした“物語”がもつ説得力の度合いこそが、いわばセゾン・フェローという助成プログラムの評価基準なのだ。

公演単位の助成では、成果を測る尺度は入場者数や、観客の“満足度”といったものに頼らざるを得ない。それらは確かに客観的に数値化できるかもしれないが、当財団の主たる関心はそこにはない。われわれが求めているのは助成先の変化であり、それに当財団のプログラムがどう寄与できるかだ。それだけに、それぞれの芸術家の特性はもちろん、助成を開始する時期が本当に適切かどうかを注意深く見ていくことが、今後もわれわれにとって選考の際の重要な視点となるだろう。

このほか、本年度は新しい取り組みとして、「舞台芸術の観客拡大策に関する研究会」を5回シリーズで開催した。観客づくりは芸術団体、劇場、フェスティバルにとって永遠の課題といえるが、とくに当財団が支援対象としている現代演劇・現代舞踊の世界においては、顧客層が小さく固定化してしまっているように見える。たとえば、一般企業に勤める男性ビジネスマンが、仕事帰りや休日に現代舞踊を観に来るとするのは、まだまだ稀なことだ。たしかに舞台にのぼる作品は質量ともに充実したかもしれないが、観客のこうした状況は、当財団が助成を始めて以来、ほとんど変わっていないといつてよいのではないか。

もちろん現場では、顧客獲得に向けてそれぞれに努力がなされている。だが、多忙であることもあり、時間をかけて新しい手法を開発したり、試行したりすることができず、マーケティングや広報は、ともすればルーティン化したものをこなすだけになりがちである。

何かいままでのやり方にとらわれない発想で、効果的な施策を考えることはできないか？ 面白いアイデアであれば、実際に試して効果をきちんと検証してみようか？ もし効果が認められたなら、そのデータは公開して誰もが利用できる共有の財産にすべきではないか？

本研究会はそうした意図で立ち上げられた。全国16団体から19名の実務家が森下スタジオに参集し、モデレーターの指導の

もと、さまざまなアイデアが検討され発表された。当財団では来年度以降、このうちのいくつかを助成して具現化し、その成果を継続的にモニタリングしていきたいと考えている。

また本年度は、年4回発行しているニュースレター「viewpoint」のリニューアルを行った。もっとも大きな変更は、各号にテーマを設けたことである。「viewpoint」はこのところ、助成対象事業の報告記事が誌面のほとんどを占めるようになってきていた。もちろん個々の記事は記録的な価値もあり、内容もそれぞれに興味深いものなのだが、「当財団の関心の所在や問題意識を伝える媒体」という、20年前の創刊時に掲げた趣意については、やや薄れつつある印象も否めなかった。

その点でいえば、一号一号特集テーマを掲げるほうが、当財団が何に関心をもっているかを読者に伝えやすいのは確かだ。「日台文化交流をめぐる」（第71号）、「劇場の外へ」（第72号）、「『連歌』の思想と芸術交流」（第73号）、「正直、オリンピックってどうですか？」（第74号）と今年のテーマを並べてみただけで、それは明らかだろう。今後も、議論を喚起するような刺激的な投げかけを行っていければと思う。

本年度の助成先の選考に際しては、下記の方々にご協力いただきました。有益なご示唆を頂戴しましたことに、深く感謝申し上げます。

内野 儀（東京大学大学院総合文化研究科教授・当財団評議員）

唐津絵里（愛知県芸術劇場シニアプロデューサー、あいちトリエンナーレ2016キュレーター）

佐々木 敦（批評家、早稲田大学文学学術院教授）

徳永京子（演劇ジャーナリスト）

乗越たかお（作家・舞踊評論家、

株式会社ジャパン・ダンス・プラグ代表）

武藤大祐（舞踊評論家・群馬県立女子大学准教授）

（敬称略・肩書は2014年12月当時）

## About Our Programs in 2015

Masao Katayama  
Managing Director

We awarded grants to 55 projects mainly in the field of contemporary theater and dance in 2015. The total amount of the grants was 63,510,000 yen, which was 6% larger than the previous year.

We also invited four Visiting Fellows from overseas and had two co-sponsorship programs. In addition, we held a seminar and cooperated with three follow-up projects of "Archiving Dance" that we co-organized with the Agency for Cultural Affairs. Please refer to the reports of the programs for details.

One of the characteristics of our activity is that we do not only offer grants but also use other methods to support the grantees. The main nonmonetary support that we offer is "space," namely Morishita Studio. The Studio is offered at reasonable prices in accordance with the grantees' needs. While support by offering rehearsal space has become more popular than before as seen in the service of Suitengu Pit in the Studio's neighborhood, the situation where young artists who work in the metropolitan area cannot find space for creation easily has not been so different from the time when Morishita Studio opened. We still receive a lot of requests.

In performing arts, sometimes a creation requires an exclusive, long-term use of a space. A recent typical example that we supported is Kuro Tanino's theater work.

Tanino used to create and present his pieces in his own apartment that he called "Hakobune (Ark)," but he had to leave the apartment due to redevelopment of the area. Since he was selected as a Saison Fellow at that time, he started to work on a full-scale creation at Morishita Studio.

After his two Junior Fellow terms, he entered a Senior Fellow term in 2012, and proposed that he would create a piece that can only be done only at Morishita Studio. In response to the proposal, we offered him the Studio for an exceptionally long period. His works involve very unique stage design by himself. It is not only a part of a work but also dramaturgically inseparable from his direction and writing. The bigger space with less restrictions let him work on a much larger

stage set, which successfully resulted in a new phase of his creation.

The first "made in Morishita Studio" piece was *Box in the Big Trunk*, premiered at the Studio in spring 2013. It toured in Europe next year and was well received (we supported the local organizers of the tour too).

The second piece *Avidya — The Dark Inn*, also created and premiered at Morishita Studio as a joint project with the Foundation, was well-received too and the 60th Kishida Kunio Drama Award was given by a unanimously decision of the juries to the play by Tanino. The piece is going to be presented in Japan and abroad.

How to recognize and evaluate the result of a grant made to an artistic activity has always been an issue. We have long been interested in the issue, and the case of Tanino was very suggestive in that context.

What we support through the Saison Fellow programs is not individual performances but the artists' creative activities, so the evaluation of the grants should be based on changes that occur during their grant-receiving terms, i.e., the development, and then the social recognition and impact, of their works and activities. It is obvious that this requires a long period of engagement, and that is one of the reasons why we put importance on multi-year support. We have supported Tanino for a long time, for seven years even if we only count his years as a Saison Fellow, and the remarkable improvement during these years (I would not dare to say that our support was the only driving force, of course) immediately becomes a denominator of our recognition of the result of our support. *Avidya* was indeed an achievement in this sense.

Another important point for us is how the uniqueness of our programs has contributed to changes that have occurred in an artist's activity. Tanino was selected as a Saison Fellow, which introduced him to the space of Morishita Studio. The encounter with the space led him to the creations of *Big Trunk* and *Avidya*. And these creations inspire other people's imagination. The degree of persuasiveness of this

kind of "story" is the evaluation basis of the grant program called "Saison Fellow."

There is no choice but to refer to the number of audience members or their "satisfaction level," when it comes to a grant for a production, to evaluate its result. It is true that this kind of evaluation can be objective and numerical, but our main interest does not lie there. What is important for us are changes of the grantees and our programs' contribution to them. Therefore, not only the characteristics of each artist but also an appropriate timing of starting to give them a grant should remain important points of view in our selection process.

A new project that we organized this year was "Seminars on Audience Cultivation in Performing Arts," a series of five seminars. Audience cultivation must be a never-ending task for arts organizations, venues and festivals, and especially in the field of contemporary theater and dance that our support is targeted at, it seems that the types of audiences have been limited and fixed. For example, it is still rare that a businessman in the private sector sees a contemporary dance performance after work or on a holiday. It is true that the quality and quantity of productions have improved, but it seems that this situation of audiences has not changed since when we started our grant programs.

Of course, people working in the field have made various efforts for gaining new audiences. However, they are too busy to take enough time to develop or test new methodologies, so their marketing and public relation activities tend to end up in repeating the routines.

Isn't it possible to conceive an effective methodology freely from what has been done? If one conceives an interesting idea, why don't they test it and verify its effect? If it is proven to be effective, shouldn't the data be published and offered for other people's use?

The seminars started in response to these questions. 19 practitioners from 16 groups across Japan got together at Morishita Studio, and facilitated by the moderator, they presented and examined various

ideas. We intend to start supporting some of these ideas, realizing them and monitoring their results next year.

We renewed our quarterly newsletter *viewpoint* this year. The largest renewal was that we set a theme for each issue. Recently, most of the contents of *viewpoint* was the reports on projects that we support. Of course, each report is a valuable documentation and interesting, but the concept, "a magazine that communicates the Foundation's interest and awareness," which we had when we published the first issue 20 years ago, seemed to have been becoming less prevailing.

Then, having a theme for each issue should help communicate our interest to the readers, for which the themes of this year must speak: "Cultural Exchange between Japan and Taiwan" (no. 71), "Going Outside the Theater Hall" (no. 72), "The Philosophy of 'Renga' and Arts Exchange" (no. 73) and "Honestly Speaking, What Do You Think of the Olympic Games?" (no. 74). We will continue to propose themes that stimulate discussion.

We would like to thank the following persons who assisted us during the selection process for their helpful instructions:

Eri Karatsu (Senior Producer, Aichi Art Theater / Curator, Aichi Triennale 2016)

Daisuke Muto (Dance Critic / Associate Professor, Gunma Prefectural Women's University)

Takao Norikoshi (Critic/Director, JAPAN DANCE PLUG Co., Ltd.)

Atsushi Sasaki (Critic / Professor, Faculty of Letters, Arts and Sciences, Waseda University)

Kyoko Tokunaga (Theater Journalist)

Tadashi Uchino (Professor, Graduate School of Arts and Sciences, The University of Tokyo / Trustee of The Saison Foundation)

(Titles are of December 2014)